



国立大学法人

帯広畜産大学

2018 概要 (平成30年度)



畜産学



知の創造と実践によって実学の学風を発展させ、
「食を支え、暮らしを守る」人材の育成を通じて、
地域および国際社会へ貢献する。

(第三期中期目標に掲げた基本的な目標)

帯広畜産大学長 奥田 潔

帯広畜産大学は、1941年に創立した帯広高等獣医学校を原点とし、帯広獣医畜産専門学校、帯広農業専門学校、帯広畜産大学を経て現在に至ります。広大な十勝平野の中心部にキャンパスを構え、獣医学・畜産学・農学に関する実学に基づいた教育研究を推進しています。

本学は、我が国唯一の国立農学系単科大学として、「知の創造と実践によって実学の学風を発展させ、『食を支え、暮らしを守る』人材の育成を通じて、地域および国際社会に貢献する」ことをミッションに掲げています。ミッション達成のため、獣医学課程では、動物の生命を司る機構を十分に理解し、疫病の処置や予防だけでなく、動物の生産・管理に秀でた獣医師を養成しています。また、畜産科学課程では、「農場から食卓まで」をスローガンとし、生命・食料・環境を科学し、食品衛生も含めた農畜産の幅広い分野で活躍する専門職業人を養成しています。さらに、獣医学・農学・畜産学融合の教育研究と国際通用力を持つ人材育成を学部だけでなく大学院でも展開しています。

地域の試験研究機関や農業・食品・動物関連企業、動物衛生や食品安全を担う国際機関、途上国に対する国際協力機関等とも連携し、社会の要請に即した農学系人材「グローバル人材」を輩出するため、以下の4つのビジョンを掲げ、実践しています。

1. 欧米水準の教育課程の構築

共同獣医学課程において国際通用力を有する獣医師を養成するため、平成31年度に欧州獣医学教育認証を取得し、欧州レベルの高度な獣医学教育を提供します。

2. 世界トップレベル大学等との国際共同研究及び教育交流

米国コーネル大学、米国ウィスコンシン大学との学術交流協定に基づき、招へい講義・ジョイントプログラムの実施や、両大学に大学院生を派遣し共同研究に参画します。また、獣医・農畜産分野の世界レベルの研究実績による国際研究協力を強化し、研究水準の向上と、関連分野の発展に貢献しています。

3. 国際安全衛生基準適応の実習環境による人材育成

大学院畜産学研究科において、国際安全衛生基準適応の施設を活用した食品安全マネジメントシステム教育プログラムを実施し、HACCPシステム構築専門家資格を付与しています。

4. 企業等社会のニーズに即した共同研究・人材育成

大学院畜産学研究科において、企業との共同研究等に基づく研究テーマを増やし、企業等の社会のニーズに即した人材を育成しています。



目次

学長挨拶	
沿革	1
歴代校長・学長	2
機構図	3
役職員	4
大学教育センター	5
畜産学部	5
大学院	7
平成30年度大学院改組について	7
別科	9
獣医学教育国際認証推進室	10
寄附講座	10
グローバルアグロメディシン研究センター	11
原虫病研究センター	12
地域連携推進センター	13
畜産フィールド科学センター	14
動物医療センター	15
動物・食品検査診断センター	16
附属図書館	17
保健管理センター	17
イングリッシュ・リソース・センター	18
情報処理センター	18
共用機器基盤センター	18
大学情報分析室	18
実験動物施設管理室	18
国際活動	19
地域貢献	22
資料編	
職員数	25
学生の定員・現員	25
外国人留学生	27
国際交流協定締結大学	28
入学者数	29
卒業者及び修了者数・就職状況	30
学生寮・国際交流会館・福利厚生施設	32
学生支援（奨学金）	32
平成30年度収入・支出予算（支出区分別）	33
科学研究費補助金等	33
外部資金受入額	34
校地及び建物	34
案内図	35
配置図	36

沿 革

昭和 16. 4. 1	帯広高等獣医学校創立
19. 4. 1	帯広獣医畜産専門学校と改称
21. 4. 1	帯広農業専門学校と改称
24. 5.31	帯広畜産大学設置(学科を獣医学科・酪農学科とし,帯広農業専門学校を包括)
24. 5.31	附属農場、附属図書館設置
28. 4. 1	総合農学科設置
28. 8. 1	附属家畜病院設置
35. 4. 1	別科(草地畜産専修)設置
36. 4. 1	農産化学科設置
38. 4. 1	農業工学科設置
39. 4. 1	草地学科設置
41. 3.31	総合農学科廃止
42. 6. 1	帯広畜産大学大学院畜産学研究科修士課程設置(獣医学専攻・酪農学専攻・農産化学専攻)
44. 4. 1	大学院畜産学研究科に農業工学専攻・草地学専攻(いずれも修士課程)を設置
44. 4. 1	保健管理センター設置
47. 4. 1	畜産経営学科設置
49. 4. 1	畜産環境学科設置
50. 9. 2	放射性同位元素実験室設置
51. 4. 1	大学院畜産学研究科に畜産経営学専攻(修士課程)を設置
53. 4. 1	大学院畜産学研究科に畜産環境学専攻(修士課程)を設置
53. 4. 1	酪農学科を家畜生産科学科に改組
57. 4. 1	大学院畜産学研究科の酪農学専攻(修士課程)を家畜生産科学専攻(修士課程)に改組
平成 2. 4. 1	家畜生産科学科、農産化学科、農業工学科、草地学科、畜産経営学科、畜産環境学科を畜産管理学科、畜産環境科学科、生物資源化学科に改組
2. 4. 1	大学院畜産学研究科の獣医学専攻(修士課程)を廃止
2. 4. 1	岐阜大学大学院連合獣医学研究科博士課程に構成大学として参加
2. 6. 8	原虫病分子免疫研究センター設置
4. 2. 1	情報処理センター設置
6. 4. 1	岩手大学大学院連合農学研究科博士課程に構成大学として参加
6. 4. 1	大学院畜産学研究科の家畜生産科学専攻、農産化学専攻、草地学専攻、農業工学専攻、畜産経営学専攻及び畜産環境学専攻(いずれも修士課程)を畜産管理学専攻、畜産環境科学専攻、生物資源化学専攻(いずれも修士課程)に改組
8. 5.11	地域共同研究センター設置
9. 4. 1	生物資源化学科を生物資源科学科に改組
12. 4. 1	原虫病分子免疫研究センターを廃止し、原虫病研究センターを設置
13. 4. 1	大学院畜産学研究科の生物資源化学専攻(修士課程)を生物資源科学専攻に改称
14. 4. 1	学部教育センター設置
14. 4. 1	畜産管理学科、畜産環境科学科、生物資源科学科を畜産科学科に改組
14. 4. 1	附属農場を廃止し、畜産フィールド科学センターを設置



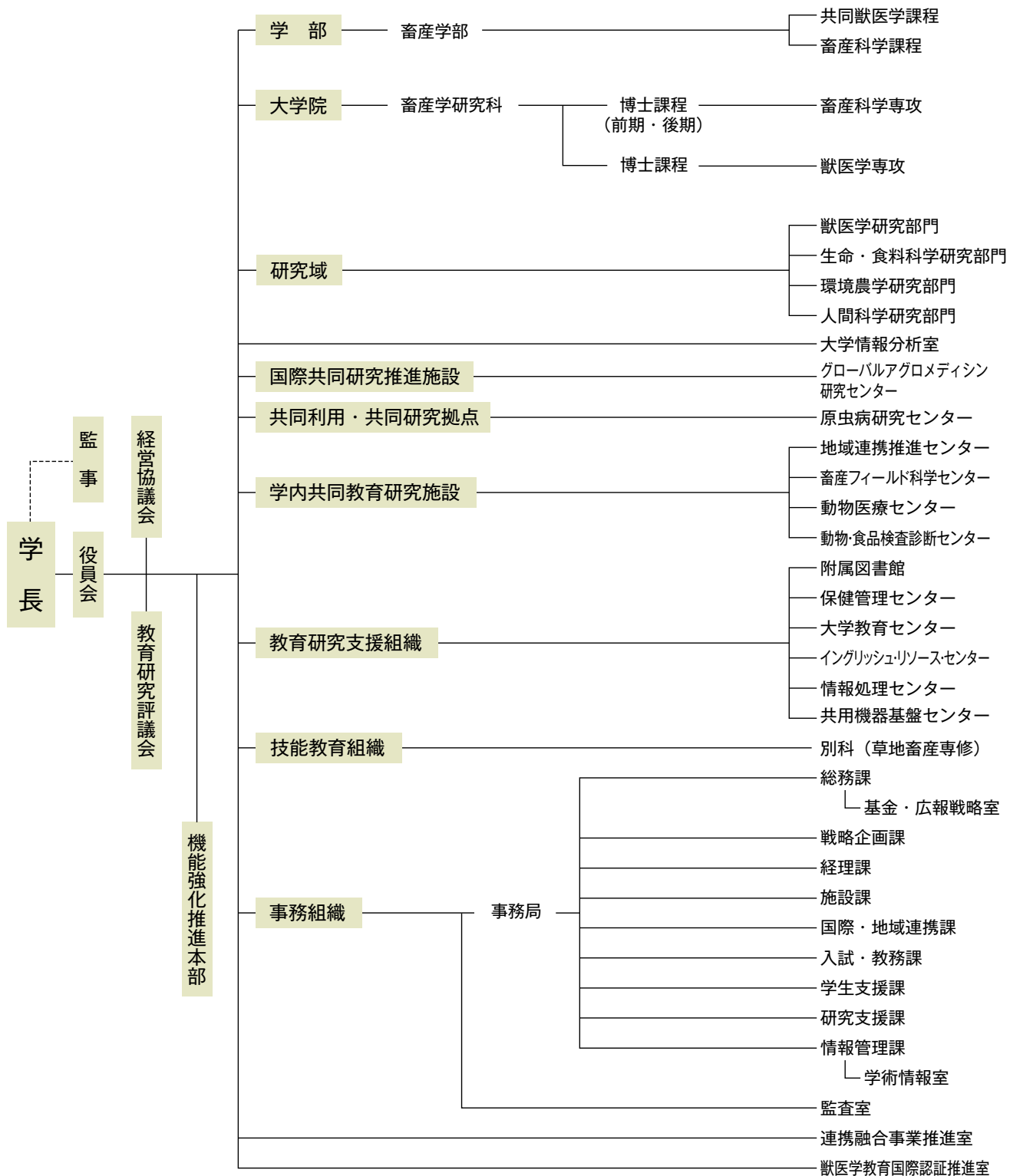
- 平成 14. 8. 1 大動物特殊疾病研究センター設置
- 16. 4. 1 国立大学法人帯広畜産大学設置
- 16. 4. 1 大学院畜産学研究科に畜産衛生学専攻（独立専攻）（修士課程）設置
- 16. 4. 1 学部教育センターを大学教育センターに改称
- 18. 4. 1 大学院畜産学研究科に畜産衛生学専攻（博士後期課程）設置
- 20. 4. 1 獣医学科、畜産科学科を獣医学課程、畜産科学課程に改組
- 21. 4. 1 附属家畜病院を動物医療センターに改称
- 21. 4. 1 イングリッシュ・リソース・センター設置
- 22. 4. 1 大学院畜産学研究科の畜産管理学専攻、畜産環境科学専攻、生物資源科学専攻（いずれも修士課程）を畜産生命科学専攻、食品科学専攻、資源環境農学専攻に改組
- 22. 4. 1 地域共同研究センターを地域連携推進センターに改組
- 22. 4. 1 大動物特殊疾病研究センターを動物・食品衛生研究センターに改組
- 24. 4. 1 帯広畜産大学畜産学部と北海道大学獣医学部との「共同獣医学課程」を設置
- 26. 4. 1 動物・食品衛生研究センターを動物・食品検査診断センターに改組
- 27. 4. 1 大学情報分析室設置
- 27. 4. 1 グローバルアグロメディシン研究センター設置
- 28.11.16 共用機器基盤センター設置
- 30. 4. 1 大学院畜産学研究科の畜産生命科学専攻、食品科学専攻、資源環境農学専攻（いずれも修士課程）及び畜産衛生学専攻（博士前期課程・博士後期課程）を廃止
- 30. 4. 1 畜産科学専攻（博士前期課程・博士後期課程）及び獣医学専攻（博士課程）を設置
- 30. 4. 1 岩手大学大学院連合農学研究科博士課程の構成大学から離脱
- 30. 4. 1 岐阜大学大学院連合獣医学研究科博士課程の解消

歴代校長・学長

名 称	氏 名	就任年月日
帯広高等獣医学校	宮 脇 富	昭和16. 4. 1
帯広獣医畜産専門学校	宮 脇 富	昭和19. 4. 1
帯広農業専門学校	宮 脇 富	昭和21. 4. 1
帯広畜産大学	宮 脇 富	昭和24. 5.31
	小華和 忠 士	昭和28. 9. 1
	田 所 哲太郎	昭和33. 1.10
	山 極 三 郎	昭和37. 1.10
	大 原 久 友	昭和45. 3. 1

名 称	氏 名	就任年月日
帯広畜産大学	西 川 義 正	昭和51. 3. 1
	鈴 木 省 三	昭和59. 3. 1
	坂 村 貞 雄	平成 2. 3. 1
	久 保 嘉 治	平成 8. 3. 1
	佐々木 康 之	平成12. 3. 1
	鈴 木 直 義	平成14. 1. 1
国立大学法人 帯広畜産大学	鈴 木 直 義	平成16. 4. 1
	長 澤 秀 行	平成20. 1. 1
	奥 田 潔	平成28. 1. 1

機構図





役職員

学長	奥田 潔
理事・副学長	柳川 久
理事・副学長	井上 昇
理事(非常勤)	門屋 充郎
監事(非常勤)	山本 眞樹夫
監事(非常勤)	江本 久美
顧問	長澤 秀行
顧問	竹川 博之
副学長	倉園 久生
副学長	福島 道広
副学長	山岸 仁
副理事	石井 利明
副理事	押田 龍夫
副理事	木田 克弥
副理事	小池 正徳
副理事	古林 与志安
副理事	中野 昌明
副理事	古岡 秀文

経営協議会(外部委員)

学校法人十文字学園理事	内田 伸子
日本ハム株式会社取締役専務執行役員	大社 啓二
国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構経営企画室主任研究員	栗原 光規
三菱商事株式会社北海道支社長	藤原 義久
東京海洋大学名誉教授	高井 陸雄
帯広市長	米沢 則寿
東洋農機株式会社取締役相談役	渡邊 純夫

部門長・別科主任

獣医学研究部門長	石川 透
生命・食料科学研究部門長	大和田 琢二
環境農学研究部門長	佐藤 禎稔
人間科学研究部門長	時岡 裕純
別科主任	三浦 秀穂

専攻長

畜産科学専攻長	佐藤 禎稔
獣医学専攻長	石川 透

センター長等

グローバルアグロメディシン研究センター長	金山 紀久
原虫病研究センター長	玄 学南
地域連携推進センター長	大庭 潔
畜産フィールド科学センター長	木田 克弥
動物・食品検査診断センター長	石井 利明
動物医療センター長	大石 明広
附属図書館長・保健管理センター長・大学教育センター長	柳川 久
イングリッシュ・リソース・センター長	Marshall Smith
情報処理センター長	佐藤 禎稔
共用機器基盤センター長	横山 直明
大学情報分析室長	井上 昇
獣医学教育国際認証推進室長	倉園 久生
連携融合事業推進室参事役	中野 昌明

事務局

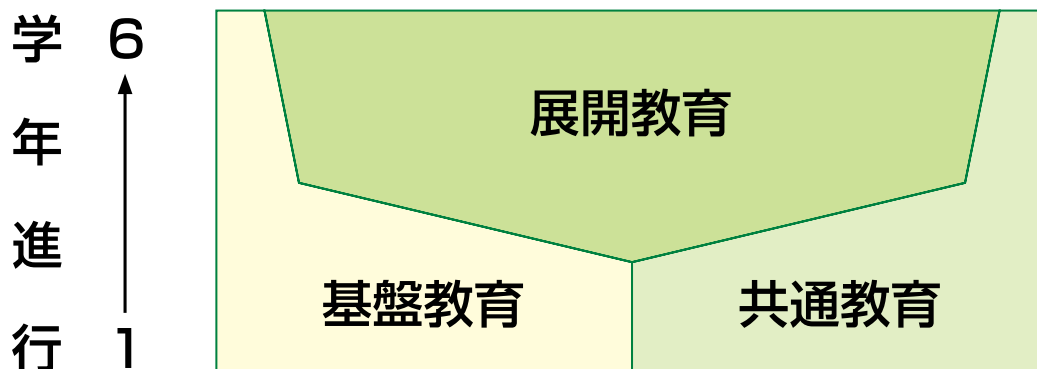
事務局長	山岸 仁
事務局次長	中野 昌明
総務課長	依藤 充明
総務課 基金・広報戦略室長	野並 雅章
戦略企画課長	山口 豊
経理課長	中谷 慎志
施設課長	荒谷 正樹
国際・地域連携課長	舛川 正晃
入試・教務課長代理	高橋 伸治
学生支援課長	牧 祐紀夫
研究支援課長	道見 康文
情報管理課長	大坪 秀典
情報管理課 学術情報室長	高野 直樹
監査室長	大林 姿子

大学教育センター

本学では、入試に関することから学部・別科の教育及び大学院教育の企画運営、学生への修学支援、生活支援などを一括して担うための組織として大学教育センターが設置されています。

大学教育センターは、入学者の選抜に関することを行う「入試部」、その下で入試広報や選抜方法について検討を行う「入試広報室」「入学者選抜方法研究室」、学部と別科の教育及び生活支援を行う「学部教育部」、大学院の教育及び生活支援を行う「大学院教育部」、学生に対する支援の内容や目的に応じた「教育支援室」「学生相談室」「就職支援室」「学生・課外活動支援室」「留学生支援室」「特別修学支援室」で構成され、教育担当理事がセンター長を務めます。

畜産学部



○アドバンス制教育システム

本学の教育課程である「アドバンス制」とは、「基盤教育」「共通教育」「展開教育」の3つの教育分野から成ります。下級学年では大学で学ぶための基礎となる幅広い知識や技術、農畜産全般の基礎知識を中心とした学習（基盤教育・共通教育）を行い、専門教育への意欲と方向性を育成します。その上で、上級学年に進むにつれて獣医農畜産の特定分野の深い専門知識・技術の学習（展開教育）へと前進（アドバンス）していく教育課程です。特に畜産科学課程では、入学時に上級学年で学習する専門分野を決定せず、農畜産のさまざまな分野についての基礎知識を学習し理解を進めながら、自主的な判断でそれぞれの学ぶ専門分野を選択していくという方式をとっています。

基盤教育

基盤教育は、広義の教養教育であり、入学生の学習行動を高校教育から大学教育に転換し、大学で学ぶための基盤を形成するとともに、社会人、職業人として生きるために必要な力を育成すること(人格教育)を目的としています。

共通教育

共通教育は、課程や専門にかかわらず必要な幅広い農畜産の基礎知識や体験を学生に提供する中で、学生の目的意識や職業意識を育て、専門知識及び技術の主体的な選択と学習へ誘導することを目的としています。



作付け実習



羊のふれあい実習(家畜改良センター十勝牧場にて)



展開教育

展開教育では、学生の目的意識や進路に応じた、現場に密着した多様な専門職業教育を提供します。展開教育の開講期は、主に4期（2年後期）以降です。展開教育には、共同獣医学課程1ユニット、畜産科学課程6ユニットの「教育ユニット」を設定しています。畜産科学課程では学生が自分の進路や興味に合わせて、所属する教育ユニットを選択する方法をとっています。

○全学農畜産実習・演習の概要

全学農畜産実習（共同獣医学課程では農畜産演習）は、「Farm to Table」に対応した広い視野の知識を提供するため、平成26年度入学者から全学農畜産実習と連動した「農畜産科学概論Ⅰ～Ⅵ」を必修科目として開設し充実を図りました。また、これらの科目は本学新入生（共同獣医学課程・畜産科学課程）が全員参加するカリキュラムとなっており、実際に「作物栽培」「乳肉食品生産」「家畜管理」を通して「生命を育み生命を食す」ことの大切さ、難しさなどを体験します。これに参加することで農畜産の知識と体験を得て、専門職業人としての必要な見識を培うことができます。



豚の飼育実習



ジャガイモの収穫実習

共同獣医学課程

平成24年度入学者から本学と北海道大学は、国際的水準の獣医学教育を実施するため、共同獣医学課程を編成し、それぞれの優位な教育施設、教育資源を相互に利用して北海道というフィールドを活かした実践的かつ先進的な国際通用性のある獣医学教育を行っています。



北大生を対象とした搾乳実習



北大における共同教育課程の交流会

■獣医学ユニット

1. 獣医師としての任務を遂行するための論理性及び倫理性に裏打ちされた行動規範を身につけるための教育を実施します。
2. 動物疾病の予防・診断・治療、動物の健康の維持増進、公衆衛生等に関する卓越した知識・技術を身につけるための教育を実施します。
3. 安定的な食料供給、家畜及び畜産物の安全確保、人獣共通感染症対策など地球規模の課題の解決に貢献するための国際的視点と知識・技術を身につけるための教育を実施します。
4. 最先端の生命科学研究に触れ、生命現象の新たな発見や医薬品の開発などにおいて獣医学を基礎とした課題解決能力と国際的な活動を実践する能力を身につけるための教育を実施します。

畜産科学課程

畜産科学課程は、獣医・農畜産融合の視点から、農場から食卓まで生命・食料・環境を科学し、農畜産の幅広い分野で活躍する専門職業人の育成を目的とします。

■家畜生産科学ユニット

家畜の飼養管理、繁殖や改良、乳肉の生産についての知識と技術を修得するための教育を実施します。

■環境生態学ユニット

多様な生物群からなる生態系の仕組みを学ぶための教育科目及び農畜産環境とその周囲を取り巻く自然環境を理解するための教育を実施します。

■食品科学ユニット

食品の一次機能（栄養成分とエネルギー）、二次機能（おいしさや食感）及び三次機能（生体調節や健康）を学ぶための教育を実施します。

■農業経済学ユニット

農畜産の生産、加工、流通、消費に関わる諸問題を、経済学や経営学を主とする社会科学的なものの見方や調査に基づき的確に把握するための教育を実施します。

■農業環境工学ユニット

農業農村工学や農業システム工学に基づく先進的農業と環境保全を両立させるために必要な技術体系を学ぶための教育を実施します。

■植物生産科学ユニット

植物生産を支える土壌と病害虫を含めた栽培環境から、その環境で育つ作物の生理、生態及び育種を総合的に理解するための教育を実施します。



農業経済学実習

大学院

より先端的な学術知識の育成、高度専門職業人としての技術の修得のために大学院教育があります。大学院畜産学研究科に、畜産科学分野の畜産科学専攻博士前期課程及び博士後期課程、獣医学分野の獣医学専攻博士課程が設置されています。また、畜産科学専攻には獣医・畜産融合分野の学位を取得するための「畜産衛生学位プログラム」が設置されています。

平成30年度大学院改組について

本学は、平成30年度から、特定分野だけの専門性では解決が難しい課題に対し、獣医学・農畜産学の幅広い知識と国際的な視点を持って地球規模課題等を解決できる人材を育成するため、強みである獣医・農畜産融合の教育研究環境を利用し、これまでの大学院畜産学研究科修士課程・博士前期課程の4専攻を、獣医学と農畜産学を融合した「畜産科学専攻」の1専攻に改組するとともに、岩手大学大学院連合農学研究科及び岐阜大学大学院連合獣医学研究科の二つの連合大学院を離脱して、博士後期課程1専攻を3年制の「畜産科学専攻」と4年制の「獣医学専攻」の2専攻に改組しました。

新たな大学院では、修士を養成する博士前期課程においては、学士課程の畜産科学課程6ユニットに相当する6コースと獣医師養成以外の学士課程を卒業した学生が動物医科学を学ぶ動物医科学コースを含む計7コースを設けました。博士を養成する博士後期課程及び博士課程では、分野を横断した科目を設置して、地球規模課題解決等の国際的視野を備えたグローバル人材の育成を図ります。



改組前(～平成29年度)			改組後(平成30年度～)		
専攻	定員	学位	専攻	定員	学位
【修士課程・博士前期課程】			【博士前期課程】		
畜産生命科学専攻	18	修士(農学)	畜産科学専攻	48	修士(農学) 修士(動物医科学) 修士(畜産衛生学)
食品科学専攻	10				
資源環境農学専攻	13				
畜産衛生学専攻	15	修士 (畜産衛生学)			
【博士課程・博士後期課程】			【博士課程・博士後期課程】		
畜産衛生学専攻	7	博士 (畜産衛生学)	畜産科学専攻	10	博士(農学) 博士(畜産衛生学)
岩手大学連合農学研究科	32※	博士(農学)	獣医学専攻	5	博士 (獣医学)
岐阜大学連合獣医学研究科	20※	博士 (獣医学)			
※岩手連大、岐阜連大ともに、構成4大学全体での定員					

畜産学研究科畜産科学専攻（博士前期課程，博士後期課程）

動物医科学，家畜生産科学，環境生態学，食品科学，農業経済学，農業環境工学，植物生産科学等の農畜産科学分野及びその学際分野における最新の知識と技術を駆使して，獣医・農畜産融合の視点から，食の安全確保をはじめとするグローバル化した多様な農畜産に関する課題の解決に取り組むことができる，高度専門職業人，教育者及び研究者を養成します。

◎博士前期課程

学部畜産科学課程の専門教育プログラムである6ユニットに対応した6コースを配置することにより学部教育との接続を円滑に行うとともに，コース横断型の教育科目を充実することで，農場から食卓までの「食の安全確保」をはじめとする農畜産学に関する課題解決能力と幅広い見識を備えた人材を育成します。また，学部畜産科学課程の教育ユニットにはない，獣医学に基礎を置く「動物医科学コース」を配置し，獣医・農畜産融合分野の教育体制を充実させています。

■動物医科学コース ⇒ 学位：修士（動物医科学）

獣医師養成以外の学士課程を卒業した学生を対象に，動物医科学に関する知識と技術を提供することにより，動物に関する様々な知識を社会に還元できる人材を養成します。

■家畜生産科学コース ⇒ 学位：修士（農学）

家畜をはじめとする動物の生体機能，育種，繁殖，栄養，管理等に関する広範かつ体系的な知識と技術を提供することにより，畜産・生命科学分野の様々な問題に対応できる人材を養成します。

■環境生態学コース ⇒ 学位：修士（農学）

農畜産環境とそれを取り巻く自然環境に関する広範かつ体系的な知識と技術を提供することにより，環境の保全，管理，利用に関する様々な問題に対応できる人材を養成します。

■食品科学コース ⇒ 学位：修士（農学）

農畜産物を原料とした食品の製造・加工及びその機能性・安全性に関する広範かつ最新の知見や技術を提供することにより，食品業界をはじめとしてバイオ産業においても活躍できる人材を養成します。

■農業経済学コース ⇒ 学位：修士（農学）

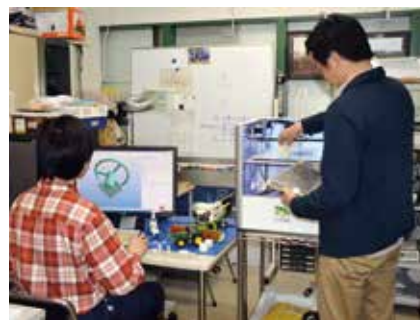
農業経済を中心とする社会科学的視点から俯瞰できるような専門教育を提供することにより、フードシステムにおける特定課題の解決に向けた実践的方策を提示することができる人材を養成します。

■農業環境工学コース ⇒ 学位：修士（農学）

理論と実践に基づく先進的な農業生産技術と環境保全を両立させるための技術体系に関する専門教育を提供することにより、農業農村工学分野や農業機械システム学分野で活躍できる人材を養成します。

■植物生産科学コース ⇒ 学位：修士（農学）

作物生産を支える土壌管理から畑作物と飼料作物の育種と栽培、病害虫管理及び草地利用までに関する知識と技術を提供することにより、農畜産業の基盤づくりを担うことができる人材を養成します。



3Dプリンタによる実験装置の製造

◎博士後期課程 ⇒ 学位：博士（農学）

家畜生産科学、環境生態学、食品科学、農業経済学、農業環境工学、植物生産科学、畜産衛生学の農畜産学分野に関する「獣医・農畜産学融合」教育を提供し、食と農のグローバル化を背景にした専門的知識及び創造性と、優れた研究開発能力及び教育能力を備えた教育者・研究者を養成します。

◎畜産衛生学位プログラム ⇒ 学位：修士（畜産衛生学）／博士（畜産衛生学）

本プログラムは、農作物・食品等の国境を越えた流通拡大を背景として企業等に求められている国際安全衛生基準の取得・維持に対応できる人材を育成するため、本学が実践してきた「食の安全確保」に関する高度な専門教育を、所属するコースに限定されることなく畜産科学専攻の全ての学生が履修可能な学位プログラムです。本プログラムでは、農畜産物をはじめとする食の安全衛生に関するマネジメントシステム等の専門教育を提供することにより、優れた実践力及び応用力を身につけた畜産衛生の専門家を養成し、その専門性に相応しい「修士（畜産衛生学）」又は「博士（畜産衛生学）」の学位を付与します。

畜産学研究科獣医学専攻（博士課程）

◎博士課程 ⇒ 学位：博士（獣医学）

基礎獣医学、病態獣医学、応用獣医学、臨床獣医学等の獣医学分野における最新の知識と技術を駆使した先端研究を担うことができる人材や、伴侶動物、産業動物及び野生動物を対象として高度な最先端医療を推進する臨床獣医師など、獣医科学と農畜産科学を融合した柔軟な発想で、農畜産業のグローバル化に伴う多様な社会ニーズに対応できる実践力とリーダーシップを発揮する能力を身につけ、食の安全や動物とヒトの健康の向上に貢献できる指導的な教育者・研究者を養成します。

別 科

別科の教育目的は、農業青年に対して科学的な農業知識と技術を確認な教養と共に付与し、地域農村社会の指導者となるような農業後継者を育てることです。教員スタッフの多くは、学部教員から構成されています。2年間で農畜産業を担うために必要な理論と知識を集中的に学ぶことができる別科は、北海道・十勝の農業に根付いたコースです。



夏季農家実習



獣医学教育国際認証推進室

平成25年4月1日、獣医学教育の欧米認証の取得及び欧米水準の獣医学教育の実施に関する業務を推進する学長直轄の特別組織として「獣医学教育国際認証推進室」を設置しました。

この推進室では、1) 認証評価組織及び認証取得大学の調査、2) 調査を踏まえた教育設備・カリキュラムの改善、3) 認証取得に向けた自己点検・評価、4) 自学自習用教育コンテンツの制作などの活動を中心となって行います。これらの活動を通じ、欧州獣医学教育認証取得を推進し、日本の獣医学教育改革の先導を目指しています。

産業動物臨床施設群の活用

平成28年10月、CT・MRIなど高度な診療機器を備えた産業動物臨床棟や、動物福祉に配慮したスキルラボや産業動物飼育棟などを新設しました。あわせて、臨床検査、病理検査及び毒性検査の実務や教育を行う動物・食品検査診断センター、病態診断棟などの周辺施設を有機的に結ぶ渡り廊下を整備することで獣医学教育における産業動物臨床拠点としての役割を担う産業動物臨床施設群が完成しました。



完成した産業動物臨床施設群

この施設群を効果的に活用した実習教育を行うことで、獣医学教育の質の向上を図っています。

EAEVE（欧州獣医学教育確立協会）による公式事前診断

平成29年7月、EAEVEの専門家が本学と北海道大学による共同獣医学課程を訪問し、欧州認証取得に係る公式事前診断が行われました。

公式事前診断は、その結果次第で今後の認証取得に大きな影響を与える重要な審査です。訪問中は、事前にEAEVEへ提出した自己評価書に基づき、両大学の施設の実地調査や関係者に対するインタビューが行われ、本課程が認証取得に必要な条件を満たしているのか詳細な審査が行われました。

この事前診断で得られた非常に有益な助言や指摘をもとに、教育環境を更に向上させ、平成31年度の欧州認証の取得を目指しています。

寄附講座

■「バレイショ遺伝資源開発学講座」

この寄附講座は、将来にわたって安全・安心なバレイショを供給するため、生産者や加工メーカーが資金を出し合って平成25年4月に開設されました。バレイショの原産地であるアンデス地方では、疫病、ウイルス、センチュウなどの病害虫に強い在来品種が作られ、畑の周辺には野生バレイショが広がっています。これらの持つ優れた遺伝的特性をバレイショ品種に導入するために必要な技術開発と素材系統の育成を行っています。



野生種の利用に関する研究

■「生命平衡科学講座（白寿）」



この寄附講座は、医療機器を製造販売する企業の(株)白寿生科学研究所と平成24年11月より、生命が本来持つ生体機能を平衡に保つ働きについて総合的に研究し、予防医学の発展につなげることを目的に設置しました。現在は、ストレス応答や血液循環、身体の柔軟性を対象した超低周波電界の効果について、研究が進められています。

グローバルアグロメディシン研究センター

本学は、日本で唯一の国立農学系単科大学として「世界トップレベル大学等との国際共同研究及び教育交流の推進」、「国際安全基準適応の実習環境による人材育成の推進」、「企業等社会のニーズに即した共同研究・人材育成の推進」の3つの戦略を柱とする機能強化事業「食と動物の国際教育研究拠点の形成」を推進しています。本センターは、この大学の機能強化事業を牽引するための中核的組織として2015年4月に設置されました。

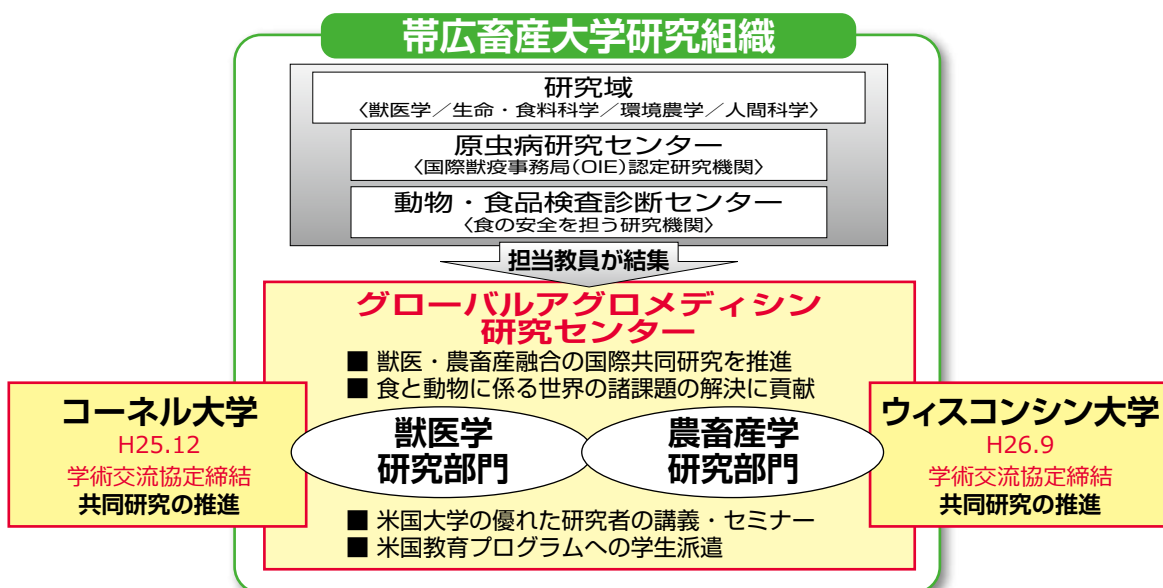
本センターの目的は、帯広畜産大学及び海外の大学の研究者が結集して獣医・農畜産融合の国際共同研究を推進し、食と動物に係る世界の諸課題の解決に貢献することです。センター内には「獣医学研究部門」及び「農畜産学研究部門」を配置して、両研究部門に本学の教員所属組織である「研究域」、「原虫病研究センター」、「動物・食品検査診断センター」等から多くの教員が国際共同研究に参画できる体制としています。両研究部門では、農学分野の世界大学ランキングトップレベルにある米国コーネル大学及び米国ウィスコンシン大学との間で多様な共同研究を展開しています。また、教育面では、両大学の優れた研究者陣による講義・セミナーを企画・実施しています。更に、米国で実施される教育プログラムに学生を派遣すると共に、ウィスコンシン大学とは、サマージョイントプログラム（ウィスコンシン大学スタディアブロード）と称して、日米両大学の学生が北海道の自然や食の生産から加工までを学ぶプログラムを実施しています。



コーネル大学での実習の様子



ウィスコンシン大学での打合せの様子





原虫病研究センター（共同利用・共同研究拠点）

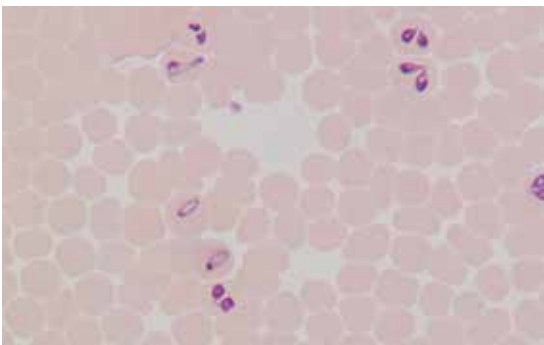
我が国の獣医・畜産系大学で唯一の家畜原虫病に関する研究拠点として、大学並びに各省庁との研究連携により、人獣共通原虫病の制圧と動物生産性向上による蛋白質資源の確保に努め、我が国は勿論、世界人類の健康と福祉に学術的に貢献し得る原虫病に関する総合的研究を行います。平成20～24年度には原虫病研究センターを中核として日本学術振興会「グローバルCOEプログラム」を実施し、国際的な高度専門職業人の育成に貢献しました。現在もAMED/JICA SATREPS「モンゴルにおける家畜原虫病の疫学調査と社会実装可能な診断法の開発」、共同利用・共同研究拠点事業「マダニバイオバンク整備とベクターバイオロジーの新展開」、日本学術振興会研究拠点形成事業「アジア・アフリカ学術基盤形成型」等を実施して国内外の原虫病対策と次世代を担い世界をリードする国際的な高度専門職業人の育成に取り組んでいます。また、平成19年にスーラ（トリパノソーマ・エバンシ感染症）、馬ピロプラズマ病及び牛バベシア病の国際獣疫事務局（OIE）リファレンスラボラトリー、平成20年に「動物原虫病の監視と制圧」に関するコラボレーティングセンター、平成28年度には試験所能力を国際的に証明するISO/IEC17025：2005の認定を受けました。



獣医・畜産領域で日本唯一の原虫病総合研究施設



セミナー風景



家畜に難治性貧血をおこすバベシア



睡眠病やナガナ病の病原体 アフリカトリパノソーマ



4月のモンゴルで観察された吸血の機会を待つマダニ



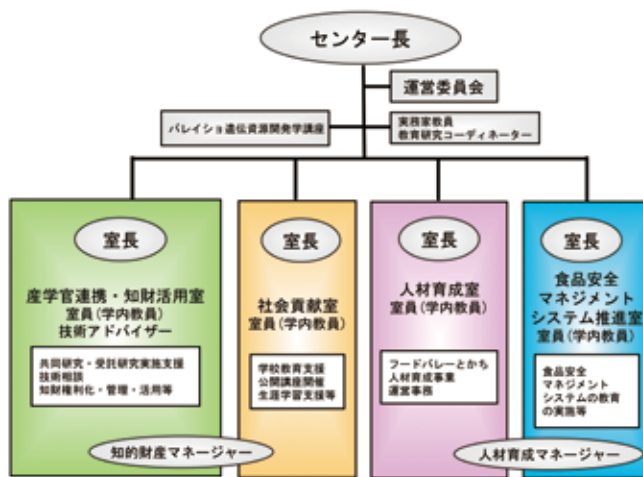
モンゴルでの家畜原虫病の調査活動の風景

地域連携推進センター

地域連携推進センターは、平成8年に学内共同教育研究施設として設立された地域共同研究センターを前身としていますが、平成24年4月にセンター外の組織であった社会貢献室、人材育成事業室および知的連携企画オフィスを統合し、産学官連携・知財活用室、社会貢献室及び人材育成室の三室体制になりました。再編して設置された産学官連携・知財活用室は、受託研究や共同研究の実施支援や技術相談、知的財産の権利化と管理及びその活用などを担当しています。社会貢献室は学校教育支援事業、公開講座、生涯学習事業の支援等を担当し、人材育成室では、帯広市との連携による「フードバレーとかち人材育成事業」の実施及び事業運営事務の統括を行っています。

平成26年4月には食品安全マネジメントシステム推進室を新たに設置し、国際標準の食品安全マネジメントシステムに関する実践的教育モデルの作成を進めるとともにHACCP構築専門家育成研修、ISO22000内部監査員研修、HACCP導入支援を実施し、平成28年度には6事業所が北海道HACCPレベル7の認証を受けるなど成果を上げています。

平成25年に改修したインキュベーションオフィスには、共同研究企業11社に入居していただきました。これらの企業とは、講義・実習担当講師としての派遣、本学学生のインターンシップ受入、本学大学院への社員の社会人入学などの交流が行われ、様々な成果が生まれつつあります。



地域連携推進センター組織図



HACCP研修の様子



共同研究をもとに開発したパン



生涯学習支援事業

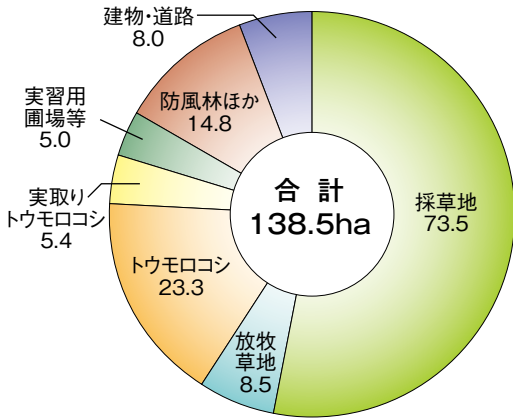


畜産フィールド科学センター

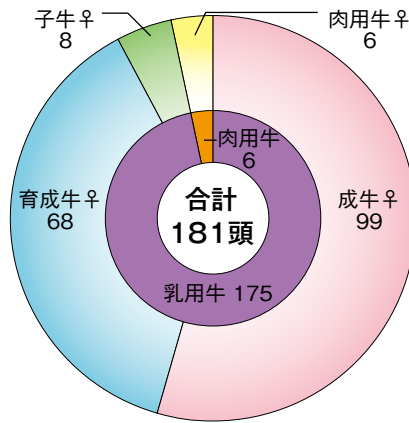
畜産フィールド科学センターは、175頭の乳牛と6頭の肉牛を飼育し、138.5haの耕地で粗飼料を完全自給すると共に輸入穀物に代わる濃厚飼料として実取りトウモロコシを栽培・利用する「資源循環型酪農」に取り組んでいる酪農場で、農畜産・獣医臨床に関する実習教育・試験研究及び地域社会への普及・体験教育活動を展開しています。学生教育では理論と実際を統合化した実践的教育を、研究活動では牛の飼養管理・疾病、飼料生産などに関する幅広い実証的応用研究者を、そして地域貢献活動として、小・中学生を対象とした体験学習から獣医師・家畜人工授精師を対象とした社会人の卒後教育も行っています。

また、センターに設置されている「家畜・植物防疫研究室」では、畜産現場における家畜及び植物防疫の研究を推進しながらキャンパス全体の防疫について情報発信しています。平成26年度には乳製品工場がFSSC22000の認証を、平成28年度には搾乳施設がISO22000の認証の資格を取得し、センターに設置されている「HACCP推進室」では、センターで生産される製品等について、食品安全マネジメントの構築と運用を行っています。

土地面積 (ha)



家畜頭数 (頭) (平成30年5月1日現在)



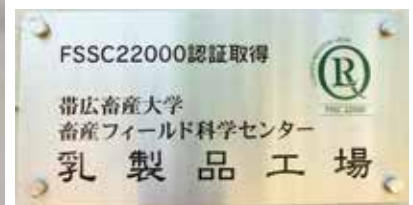
フィールド科学センター入口



ふれあい牧場親子体験学習



ISO22000認証取得
搾乳施設
(うしぶ。の搾乳風景)



FSSC22000認証取得工場
製造される畜大牛乳と
畜大牛乳アイスクリーム

動物医療センター

動物医療センターでは、動物病院、獣医学研究部門、動物・食品検査診断センター、および畜産フィールド科学センターなどの教員から成る各種診療科を置いて、一般外来の動物診療以外にも、動物の検査・診断・治療に取り組んでいますが、同時に、『教育病院』としての学部学生・大学院生への実践的（参加型）臨床実習教育の場であり、さらには『研究施設』としての臨床的学術研究の場ともなっています。その他に、地域臨床獣医師のための『二次診療基幹病院』や『生涯教育の提供機関』としての役割を担っています。

診療活動においては、高度獣医療提供のための設備等充実がなされた診療施設であることはいまでもありませんが、他大学と比較して産業動物（大動物）の占める割合がきわめて高いのも特徴の1つであり、取扱う動物の診療頭数は下表のとおりとなっています。

診療頭数実績（頭）

（平成29年度）

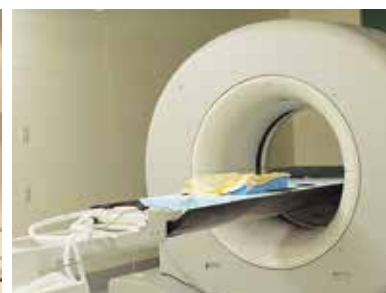
区分	伴侶動物（小動物）				産業動物（大動物）				計
	犬	猫	その他	小計	馬	牛	その他	小計	
診療頭数	3,903	531	4	4,438	1,640	4,447	63	6,150	10,588



伴侶動物腹腔鏡手術風景



MRI装置



CT装置



馬の手術風景



臨床繁殖検査風景



牛の手術風景



画像診断車による検査風景

この産業動物総合画像診断車は、本学だけが保有する世界唯一のものであり、北海道各地の牛舎を巡回してX線や超音波検査などの画像診断による診療提供が実施されています。



動物・食品検査診断センター

近年、腸管出血性大腸菌O157や鳥インフルエンザをはじめとする新興・再興感染症，人獣共通感染症，大規模食中毒，食品偽装など「食」の安心と安全を脅かす深刻な問題が次々に発生しています。このような食の安全性を巡る危機的状況は，今日の獣医学教育・研究の動向に少なからぬ影響を与えており，本学においても，これらの問題の解決のため



に地域的特性や専門性に依拠した新たな検査診断の実施，並びに教育の拠点形成のために平成26年に動物・食品検査診断センターを立ち上げました。

本センターは我が国初となる獣医学部の動物・食品検査診断センターであり，ISO/IEC17025認定を平成29年に取得し，正確な測定/校正結果を生み出す能力において厳しい審査基準に適合し認定を受けた試験機関です。その設置目的は“農場から食卓まで”の食の安全性を確保するために，家畜や食品の検査診断を行い動物衛生と食品衛生に寄与することで社会に貢献することです。即ち，本センターは畜産物の生産から流通・消費に至る過程で発生する，または発生が予想される種々の問題に対処し，食の安全性確保に資する検査診断と当該分野の教育の拠点です。教育では特に高度専門職業人育成に貢献します。検査診断では，様々な動物感染症に対する検査や食品検査を中心にを行い，更に教育では学部教育・大学院教育・卒後教育・社会人教育を行います。

検査診断分野（4分野）

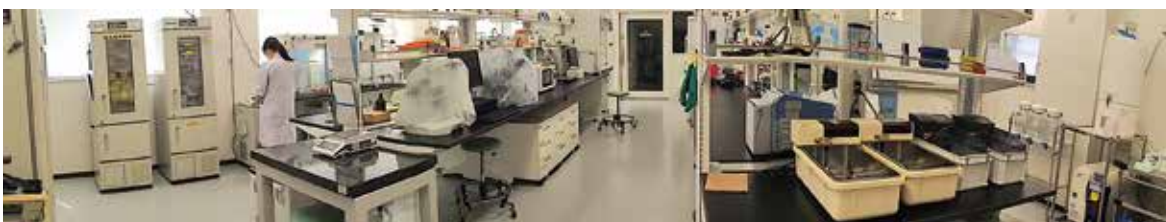
本センターは，1）食品有害微生物分野，2）毒性解析分野，3）真菌検査分野，4）検査精度管理研究分野の4つの検査診断分野で構成されています。



細菌検査（培養検査）



ウイルス検査（遺伝子検査）



微生物検査室

附属図書館

図書館資料を体系的に収集・整理・保存し、その利用奉仕につとめ、広く学術文化の向上に寄与することを目的としています。また、高度情報化社会、かつ、多種多様な知的要求に応ずることができるよう図書館のネットワーク化、電子図書館化など大学図書館として対応できるよう努力しています。

資料数

(平成30年3月31日現在)

図書冊数

和書	165,991
洋書	49,220
計	215,211

雑誌種類数

和雑誌	4,832
洋雑誌	1,278
計	6,110

視聴覚資料数

DVD・BDビデオ テープなど	2,465
--------------------	-------

電子ジャーナルタイトル

Elsevier Science Direct	Springer LINK
Wiley Online Library	Science
Journal of Biological Chemistry	Nature
BioOne	Veterinary Record
American Chemical Society (ACS)	
Proceedings of the National Academy of Sciences of the U.S.A. (PNAS)	
畜産の研究	

利用状況

(平成29年度)

入館者	図書貸出冊数	レファレンスサービス	文献複写依頼件数	文献複写受付件数	文献複写海外依頼件数	帯広市図書館 市民文庫 貸出冊数
91,464人 (1日平均281人)	19,898冊 (1日平均61冊)	361件	349件	184件	1件	502冊



閲覧室



館内のガイダンス

保健管理センター

保健管理センターは、学生・職員の保健管理に関する専門的業務を行う組織で、健康増進・保持と疾病予防に向けた取り組みを行っています。センターでは専任の医師と看護師等が常駐して急病者に対する処置・投薬などのプライマリケアを行い、必要時には市内の医療機関と連携して治療にあたります。また、嘱託の精神科医や、カウンセラーによるメンタル相談を定期的に行っています。



イングリッシュ・リソース・センター

イングリッシュ・リソース・センターは、英語教員が中心となって運営する組織で、英語教育の積極的な推進、及び大学の管理運営における英語関連の支援に取り組んでいます。

英語教育推進の観点からは、①英語の各授業と連動するリーディング教材の貸し出し、②学生・教職員が集って昼食と会話を楽しむイングリッシュ・ランチの実施、③学生が自身の海外体験を英語で発表するトラベローグの開催、などを行っています。

また、大学の管理運営における支援としては、①学生・教員が執筆する英語論文の校正、②学内の各事務組織が作成する英語版文書のチェック、などを担当しています。



英語教材の貸出

情報処理センター

情報処理センターは、「情報処理」についての教育、研究の中心的役割を担っており学内ネットワークシステムの拠点でもあります。ウィルス対策ソフトウェアを全学に無償配布し、また、ネットワーク監視ツールを導入するなど、学内ネットワーク環境の安全かつ安定的な運用を行っています。マイクロソフトと包括ライセンス契約を結んでおり、教職員や学生が自由にオフィス製品の利用やOSのバージョンアップを行います。スパムメール対策としてセキュアMXを導入し、教職員にとって快適なメール環境を実現しています。

更に事務系の業務サーバを情報処理センターで一元管理し、安全性の確保、運用の効率化を実現しています。



コンピュータ実習

共用機器基盤センター

共用機器基盤センターは、本学が保有する研究設備・機器の共用化を推進し、かつ共通機器室の管理運営を行う中核組織です。本学では、制定されたポリシー「研究機器は大学全体のもの」という理念のもと、多くの研究機器を学内外に開放しています。効率的に研究機器を整備することで研究費の有効活用に寄与し、また複数の研究者等が利用できる環境を整えることで新たな知の創出と人材交流の促進を目指します。



共通機器室における分析の様子

大学情報分析室

大学情報分析室は、大学業務に係る各種情報の収集及び分析を行い、本学の教育、研究、国際、社会貢献活動及び管理業務の支援や大学運営の改善・強化を推進するための業務を行っています。

実験動物施設管理室

実験動物施設管理室は、学内の動物飼育室・動物実験室の一元管理を目的として設置した共同利用施設で、平成23年には、農学系としては初めて、国立大学法人動物実験施設協議会の会員施設として認められました。

動物実験を取り巻く環境あるいは行政の変化を適切に捉えながら、実験動物施設、そこに飼育されている動物の適正な管理・運営および施設利用者に対する実験サポートを実施しています。



実験動物舎 I


国際活動

帯広畜産大学は、中期目標に、知の創造と実践によって実学の学風を発展させ、「食を支え、暮らしを守る」人材の育成を通じて地域及び国際社会へ貢献することを大学のミッションとして掲げ、獣医・農畜産学分野の教育研究を通じて人類の健康と国際社会の平和に貢献するため、海外大学、国際機関、国際協力機関との連携事業を充実するとともに、留学交流を推進しています。



国際協力

本学では、獣医・農畜産学分野での実学研究の成果を還元し、国際社会の持続的発展に資するため、JICA事業の「技術協力プロジェクト」や「草の根技術協力」、またJICAと独立行政法人科学技術振興機構<JST>及び日本医療研究機構<AMED>が共同で行う事業「地球規模課題対応国際科学技術協力」<SATREPS>等に参画し、専門家として本学教員を開発途上国に派遣しています。平成30年3月末までにJICA専門家として派遣した本学教員等は316名です。その他、JICAからの委託に基づき、開発途上国の研究者、技術者等を受け入れており、平成30年3月末までに本学が受け入れた研修員は91カ国770名です。

■専門家の派遣

<p>パラグアイ共和国 東部地域・酪農振興のための農業研究拠点の形成と人材育成支援 平成28年7月～平成32年6月 (草の根技術協力事業)</p>	<p>平成28年6月をもって終了した「東端畑作地域・酪農技術向上支援」事業で課題となった技術者の知識向上と、酪農家を指導できる体制整備に焦点を当て、28年7月から開始しました。本事業では「知識・技術の向上」→「適切な指導」→「酪農家の利益向上又は農協に対する信頼向上」→「農協の指導体制の拡充」という酪農振興サイクルを構築するため、前事業の成果及びデモンストレーション農場を活用し、酪農技術研修拠点の強化を目指しています。昨年度には、現地の農協普及員を対象とした本邦研修を実施し、専門家による講義や実習、視察をとおして知識を深めると共に、酪農家を指導できる人材の育成を目指しプレゼンテーション作成指導を行いました。</p>
<p>モンゴル国 モンゴルにおける家畜原虫病の疫学調査と社会実装可能な診断法の開発 平成26年6月～平成31年5月 (地球規模課題対応国際科学技術協力事業)</p>	<p>多くの家畜原虫病は、持続感染して貧血や流産を引き起こし、慢性的に家畜の健康状態を悪化させます。本課題では、これまでの研究により確立してきた診断法および分類技術を用いて大規模な疫学調査を実施し、その分布と被害の実態を明らかにし、モンゴル野生原虫株由来遺伝子や蛋白質試料を用いたイムノクロマトグラフィー法による簡易迅速診断試法を開発しました。今後は、社会実装に向け、普及することだけでなく、共同研究を通じて両国の若手専門家を育成し、成果に継続性と発展性を与え、原虫病早期発見体制を整備することで、同国および世界の家畜原虫病対策と畜産振興に貢献すると考え、活動しています。</p> 

■研修員の受入れ


<p>バリューチェーンの整備を通じた農村振興</p>	<p>本コースでは生産現場と消費者を結ぶバリューチェーン、特に高度な知識や技術、組織化が必要とされるミルクチェーンの構築を縦軸に、地域における構築連携や資源の有効利用、農村と都会の交流を通じた食の安心・安全や農業への理解を深める取り組みの紹介を横軸に、包括的な農村計画を立案、構築できる能力の涵養を目指して実施します。</p> 
<p>家畜感染症上級専門家育成</p>	<p>途上国の人獣共通感染症対策を担う専門家が、国際水準の知識・診断技術と国際的視野に基づく実践能力を習得することを目的として実施します。期間中は学内での研究活動だけに留まらず、複数回研修旅行を実施し、研究機関の視察や外部講師による講義をとおして知見を広げます。</p> 



国際協力人材の育成

本学では、農場から食卓までの幅広い領域を学際的視点で捉える能力、あらゆる現場に適応できる知識・実践力、地球規模課題解決等の国際的視野を備えたグローバル人材を育成するため、学内における獣医・農畜産融合の実践的教育プログラムのほか、独立行政法人国際協力機構<JICA>との連携による国際協力経験機会や海外協定締結大学へ留学など様々な学生海外派遣プログラムを提供しています。

■学生の海外派遣機会の提供

<p>青年海外協力隊による学生海外派遣</p>	<p>本学ではこれまで、在学生・卒業生合わせて、300名以上のJICA青年海外協力隊員を輩出しています。平成17年度から平成20年度にかけては、JICAの「フィリピン酪農開発強化プロジェクト」に短期隊員として、合計32名の学生をフィリピンに派遣し、酪農に関する育種・繁殖・衛生管理・濃厚飼料等の分野の技術支援を行いました。</p>  <p>平成24年度から開始した南米パラグアイ共和国の東南端イタプア県において酪農技術向上の支援を行う「帯広-JICA 協力隊連携事業」においては、我が国初の試みである長期と短期を組み合わせたボランティア派遣事業を協同で行い、第1フェーズ終了の平成30年3月末までに活動期間2年の長期隊員は12名、活動期間約1.5ヶ月の短期隊員は37名、合わせて計49名の本学の在学生・卒業生を派遣しました。</p> <p>この間、乳質の改善や飼料改善など様々なことに取り組んだ結果、パラグアイ側、日本側からも高い評価を頂き、平成30年4月より同じイタプア県内の他の市において第2フェーズを開始しました。第2フェーズにおいても第1フェーズ同様の成果を期待されています。</p> <p>なお、派遣者は、学内で公募・選抜し（長期派遣は卒業生を含む。）、在学生は授業科目「海外フィールドワーク」の単位を取得できます。</p>
<p>国際共同研究推進のための大学院生派遣プログラム</p>	<p>本学では、獣医・農畜産分野の世界レベルの研究実績による国際研究協力を強化するため、平成27年4月にグローバルアグロメディシン研究センターを設置し、米国コーネル大学および米国ウィスコンシン大学と、獣医・農畜産分野の国際共同研究、招聘外国人教員の学生教育への参加、米国大学で実践される特色ある教育プログラムの導入を推進しています。その一環として、コーネル大学またはウィスコンシン大学に大学院生を派遣し、本学との間で行われている国際共同研究に参画することにより、世界トップレベルの研究機関における研究活動の機会を提供するものです。</p> <p>そのため、海外の大学で単に講義を受講するといった留学ではなく、本学および派遣先教員の指導の下、両大学が進めている国際共同研究の一部を担うことが明確である研究活動が含まれた海外派遣を支援します。</p>
<p>海外協定締結大学への留学</p>	<p>本学では、学生交流協定を締結している外国の大学に学生を派遣する短期留学制度を実施しています。対象となる学生は、留学時において学部3年次以上（獣医学課程は5年次以上）又は大学院生で、派遣期間は3ヶ月以上1年以内です。</p> <p>留学先の大学において取得した単位は、本学の大学教育センターで審査の上、卒業又は修了要件単位として認定されます。また、留学先大学における授業料は免除されます。</p>

■海外の学生との交流

<p>サマージョイントプログラム</p>	<p>平成30年度から、ウィスコンシン大学の学生と共に学ぶ“サマージョイントプログラム”を開講します。このプログラムは、帯広畜産大学、ウィスコンシン大学の学生がチームとなることで行われます。学生は相互にコミュニケーションを図りながら、グループディスカッションやプレゼンテーション、フィールドワークを通じて、北海道の自然、食の生産から加工までについて学びを深めます。</p> <p>短期間ではありますが、異文化適応能力や英語によるコミュニケーション能力の育成を図る内容であり、グローバルな視野をもって社会で活躍したいと思っている学生にとっては、非常に有意義なプログラムとなっています。</p>
----------------------	---

■入試制度

<p>国際協力 特別選抜制度 (平成18年～)</p>	<p>大学院畜産学研究科において、青年海外協力隊等の海外ボランティア活動や国際協力実務経験者を対象とした学生募集を行っています。本制度により入学した学生には、授業料相当額(月額5万円)の奨学金を貸与し、課程修了後に国際協力関係の業務に従事した場合には、貸与した奨学金の返還を免除することとしています。</p>
-------------------------------------	--

■教育コース

<p>国際教育 アドバンスモデル</p>	<p>現代社会では、農業や食料に関わる様々な職場において国際事情、諸外国との関係、外国人との交流等を重要視しなければなりません。また、農学、畜産科学、獣医学は地球規模課題である食料安全保障、環境問題、エネルギー問題、感染症等と密接に関連します。</p> <p>畜産学部では、これまでと同様に各専門ユニットの教育科目において国際的視野を醸成するための教育を実践しますが、さらに、平成26年度より学部卒業後又は大学院進学・修了後速やかに国際舞台で活躍したいと考えている学生、組織の国際部門で活躍したいと考えている学生等を対象に、外国人との高いコミュニケーションスキルの習得や地球規模課題が顕著である開発途上国の獣医農畜産事情等を深く理解するために効果的な科目を履修するモデル「国際教育アドバンスモデル」を用意し、サポートする体制をつくっています。</p>
--------------------------	---

■学際教育プログラム

<p>国際教育プログラム (International Studies Program)</p>	<p>現代社会では、農業や食料に関わる様々な職場において国際事情、諸外国との関係、外国人との交流等を重要視しなければなりません。また、農学、畜産科学、獣医学は地球規模課題である食料安全保障、環境問題、エネルギー問題、感染症等と密接に関連します。本学畜産学部では、各専門ユニットの教育科目において国際的視野を醸成するための教育を実践しますが、さらに、学部卒業後又は大学院進学・修了後速やかに国際舞台で活躍したいと考えている学生、組織の国際部門で活躍したいと考えている学生等を対象に、外国人との高いコミュニケーションスキルの習得や地球規模課題が顕著である開発途上国の獣医農畜産事情等を深く理解するために効果的な科目を履修するモデル「国際教育プログラム」を用意し、サポートする体制をつくっています。</p>
<p>大学院進学プログラム (Pre-Graduate Course Program)</p>	<p>本学大学院又は他大学大学院進学を目的として、英語科目を3年次後期までに履修した上で、本学大学院の指定する授業科目を4年次に履修することができるプログラムです。</p> <p>英語科目は、5科目(10単位)をA⁻以上、またはTOEICのスコア650以上を目指してください。TOEICのスコア650(出願締切日から過去2年度以内に取得したものに限り)であれば、本学大学院入学時の外国語の試験は免除されます。</p> <p>また、上記の英語科目についての条件を3年次後期までにクリアした場合、大学院の授業科目を4年次に6単位を限度として履修できることとします。履修した科目の単位については、本学大学院入学後に、修了要件となる単位として認定できるものとします。</p>
<p>動物医科学コース 進学プログラム (Veterinary Life Science Program)</p>	<p>本学大学院、畜産科学専攻博士前期課程「動物医科学コース」進学を目指す学生のためのプログラムです。</p> <p>家畜を含めた動物一般の疾病やその診断・治療、また体の仕組みや調節機構をより詳しく知りたいと考える学生に対し、基礎生物学や農畜産学の基礎を学ぶことを目的としています。</p> <p>英語科目は、5科目(10単位)をA⁻以上、またはTOEICのスコア650以上を目指してください。TOEICのスコア650(出願締切日から過去2年度以内に取得したものに限り)であれば、本学大学院入学時の外国語の試験は免除されます。</p>



地域貢献

地域研究機関による連携協力決議

事項名	スクラム十勝
目的・概要	十勝圏に存立する公設6研究機関が我が国の動植物性食品生産の中核である十勝地域が抱える食の安全と安心（生産と衛生）に関する多様な課題を解決並びに課題解決に資する高度な人材を育成し、十勝地域及び我が国並びに世界における食の安全及び安心の確立ひいては健全な食文化の構築に資するため、各研究機関等間における包括的な連携協力を推進するための枠組みを確立することを目的とする。
構成機関	国立大学法人帯広畜産大学 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構北海道農業研究センター芽室研究拠点 地方独立行政法人北海道立総合研究機構畜産試験場 地方独立行政法人北海道立総合研究機構十勝農業試験場 公益財団法人とかち財団 独立行政法人家畜改良センター十勝牧場
決議年月日	2005. 3.17

高大連携事業

平成17年3月に北海道帯広農業高等学校と、平成22年3月に北海道更別農業高等学校との連携に関する協定を締結しました。

大学と高校との垣根を越えた連携で、教員の相互派遣や生徒および学生の実習受入のみならず、昨今重要視されているHACCPに関する学習支援や、サークル活動を通じた生徒と学生の交流など、様々な高大連携事業を展開しています。

帯広市との連携事業

平成17年6月に締結した包括連携協定に基づき、学生と企業の共同研究の推進や、学生が中心に実施するまちなか活性化プロジェクト等、様々な地域貢献事業を積極的に展開しています。

■ 帯広市とのフードバレーとかち人材育成事業

本事業では、地域の農業・食品関連産業のさらなる事業展開を支える人材の育成、企業の発展に寄与する人材の資成を支援しています。平成30年度は、ビジネスコース、食品安全管理コース、農業生産者コースの3つのコースを設け実施します。更に修了生を対象に、アグリビジネスの事業化や課題解決を支援する個別のフォローアップ制度を設け、企業ニーズに対応した人材のスキルアップを行っています。



アグリ・フードビジネスプランコース（応用編）

■ おびひろ動物園との連携協定



おびひろ動物園に設置されている「帯広畜産大学サテライト」

帯広畜産大学とおびひろ動物園は、相互に協力して動物に関する教育・研究の充実を目指すと共に、魅力ある動物園としての活性化を図ることを目的として、平成22年7月29日に連携協定を締結しました。これまで、インターンシップやヒツジの毛刈り作業の公開などの共同イベントのほか「学生企画公募事業（ずーぶろ）」と命名した学生参加による魅力的な動物園づくり事業の実施、また、おびひろ動物園内に「帯広畜産大学サテライトブース」を開設し骨格標本の展示を行うなどの連携事業を展開しています。

包括連携協定

■ よつ葉乳業株式会社



帯広畜産大学デイリースクール実習の様子

学術の振興及び十勝地域における農業の発展と北海道農業へ貢献することを目的として、平成21年7月6日によつ葉乳業株式会社と包括連携協定を締結しました。現在、「教育・研究の振興」、「研究成果の社会活用」、「共同研究の実施、研究者の交流」などの連携事業を実施しています。

平成27年度からは、次世代酪農家の育成を目的に「帯広畜産大学デイリースクール」を開催しています。

■ 一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団

文化やスポーツを通じた社会貢献や振興に寄与することを目的として、平成24年3月30日に一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団と連携協定を締結しました。この連携により、平成25年度から、本学の学生サークルが主体となり、スポーツ体験などを通じた市民との交流を行う「みんなのちくだい。」事業、平成28年度からは、作物の作付けから収穫までの一連の農作業を通じて、参加者の食育はもちろんのこと、心身の健康増進を目的とする「とかちism!どきどきファーマーリング」事業も実施しています。



「熱気球にふれてみよう！乗ってみよう！」



「とかちism!どきどきファーマーリング」

■ 敷島製パン株式会社

学術の振興及び十勝地域における農業の発展と北海道農業へ貢献することを目的として、平成24年4月20日に敷島製パン株式会社と包括連携協定を締結しました。十勝の小麦「ゆめちから」や本学の研究成果である「とかち野酵母」を利用した共同研究や社会人学生の受入れなどの連携事業を展開しています。この協定に基づき、製パン実験施設「とかち夢パン工房」が完成し、様々な教育研究に利用されています。



農産加工実験棟「とかち夢パン工房」と「ポテト工房」

■ カルビー株式会社

学術の振興及び十勝地域における農業の発展と北海道農業へ貢献することを目的として、平成24年10月2日にカルビー株式会社と包括連携協定を締結しました。

この協定に基づき、平成25年から共同研究が進められ、毎年、「バレイショ栽培における施肥技術と土壌改良に関する研究成果発表会」を開催しています。



■ 北海道立総合研究機構との連携・協力に関する協定

地域の産業及び経済の発展に寄与することを目的として、平成25年9月26日に北海道立総合研究機構と連携・協力に関する協定を締結しました。この協定に基づき、「研究開発の推進」、「人材交流・人材育成」「研究資源の共有」などの連携事業に取り組んでいます。

■ 株式会社十勝毎日新聞社

大学と報道機関、それぞれの機能と強みを生かし、相互に充実した連携協定を行いながら、十勝地域における様々な課題や、特に基幹産業である農業の振興に関する研究・報道等を通じて社会に成果を還元し、地域の活性化への貢献をするとともに、住民の生活向上や学生の成長・発展に寄与することを目的として平成28年8月10日に株式会社十勝毎日新聞社と包括連携協定を締結しました。この協定に基づき、イベントの共催、講師派遣などを行っています。



イベント共催（リベラルアーツ講演会）

■ 日本ハム株式会社

農畜産の活性化と将来を担う人材の教育、育成を目的として、平成29年12月5日に日本ハム株式会社と包括連携協定を締結しました。

本学の教員や学生が養豚及び養鶏農場、処理工場、ハム・ソーセージ製造工場といったニッポンハムグループの道内事業拠点において実地研修を行うなど両者は農畜産の活性化と将来を担う人材の教育、育成に向けて取り組んでおり、農畜産の課題解決に両者が連携することで、農畜産の活性化を促し、将来を担う人材育成に繋がる活動などを進めています。

平成29年度社会貢献事業

事業名	内容	件数
学校教育支援事業	特別支援学級乗馬体験、高大連携事業、インターンシップの受入など	61
高等教育支援事業	大学施設見学、講師派遣など	18
社会人学習支援事業	フードバレーとかち人材育成事業、生産獣医療技術研修など	135
生涯学習支援事業	市民開放授業、市民大学講座、障がい者乗馬体験事業など	76
大学施設開放	体育館、かしわプラザ、講義棟など	61
イベント	ふれあい牧場親子体験、ちくだい馬フォーラム、畜大ふれあいフェスティバルなど	20
国際貢献	JICA連携事業など	27
まちづくり支援	おびひろ動物園連携事業、ちくだいらんぷ事業、期日前投票所の設置など	24



障がい者乗馬体験事業



畜大ふれあいフェスティバル

職員数

(平成30年5月1日現在)

区分	学 長	理 事	監 事	教授			准教授			講師			助教			教員計			事務・技術職員			総合計			
				男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
役員	1		2 (1)	(2)											0	0	0				3 (2)	(1)	3 (3)		
研究域					42	2	44	22	4	26	6	1	7	11	5	16	81	12	93			81	12	93	
グローバルアグロ メディシン研究センター					6	1	7	3		3	1		1	6		6	16	1	17			16	1	17	
原虫病研究センター					7		7	2		2				1	1	9	1	10	1		1	10	1	11	
地域連携推進センター																0	0	0	2		2	2	0	2	
畜産フーズ科学センター					1	1	2	1	1	2				1	1	2	3	5	6	2	8	8	5	13	
動物医療センター					1		1						1		1	2	0	2	1		1	3	0	3	
動物食品検査診断センター							1		1				1	1	1	1	2					1	1	2	
保健管理センター															0	0	0	1	1	2	1	1	2		
事務局															0	0	0	50	23	73	50	23	73		
連携融合事業推進室															0	0	0					0	0	0	
監査室															0	0	0	1	2	3	1	2	3		
計	1		2 (1)	(2)	57	4	61	29	5	34	7	1	8	18	8	26	111	18	129	62	28	90	176 (2)	46 (1)	222 (3)

() は非常勤で外数

学生の定員・現員

畜産学部

(平成30年5月1日現在)

学科・課程	入学定員		収容定員		現 員					
					1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次
共同獣医学課程	40	240	男	20	16	23	20	21	21	121
			女	20	25	20	23	22	22	132
			計	40	41	43	43	43	43	253
獣医学課程	-	-	男			1		1	2	4
			女			0		0	0	0
			計			1		1	2	4
畜産科学課程	210 ※10	840 ※20	男	81(1)	76(2)	85(2)	114(2)			356(7)
			女	132(1)	138	154(1)	133(1)			557(3)
			計	213(2)	214(2)	239(3)	247(3)			913(10)
計	260	1,100	男	101(1)	92(2)	109(2)	134(2)	22	23	481(7)
			女	152(1)	163	174(1)	156(1)	22	22	689(3)
			計	253(2)	255(2)	283(3)	290(3)	44	45	1170(10)

※は第3年次編入学を示す

注：()内は内数で外国人留学生を示す



畜産学研究科（平成29年度入学者まで）

（平成30年5月1日現在）

課程	専攻	入学定員	収容定員	現 員												
				1年次			2年次			3年次			計			
				男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
修士課程	畜産生命科学専攻	18	18	1	1	2	8(1)	10	18(1)	-	-	-	9(1)	11	20(1)	
	食品科学専攻	10	10	-	1(1)	1(1)	9(2)	3	12(2)	-	-	-	9(2)	4(1)	13(3)	
	資源環境農学専攻	13	13	-	-	-	9(2)	4	13(2)	-	-	-	9(2)	4	13(2)	
	小計	41	41	1	2(1)	3(1)	26(5)	17	43(5)	-	-	-	27(5)	19(1)	46(6)	
博士課程	畜産学専攻	前期課程	15	15	-	1(1)	1(1)	5(1)	7(2)	12(3)	-	-	-	5(1)	8(3)	13(4)
		後期課程	7	14	4(4)	3(3)	7(7)	3(3)	3(3)	6(6)	5(5)	3(3)	8(8)	12(12)	9(9)	21(21)
	小計	22	29	4(4)	4(4)	8(8)	8(4)	10(5)	18(9)	5(5)	3(3)	8(8)	17(13)	17(12)	34(25)	
合計		63	70	5(4)	6(5)	11(9)	34(9)	27(5)	61(14)	5(5)	3(3)	8(8)	44(18)	36(13)	80(31)	

注：()内は内数で外国人留学生を示す

畜産学研究科（平成30年度入学者から）

（平成30年5月1日現在）

課程	専攻	入学定員	収容定員	現 員														
				1年次			2年次			3年次			4年次			計		
				男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
博士課程	畜産科学専攻	前期課程	48	48	27(8)	30(3)	57(11)	-	-	-	-	-	-	-	-	27(8)	30(3)	57(11)
		後期課程	10	10	6(2)	2(1)	8(3)	-	-	-	-	-	-	-	-	6(2)	2(1)	8(3)
	獣医学専攻	5	5	2(1)	-	2(1)	-	-	-	-	-	-	-	-	2(1)	0	2(1)	
計		63	63	35(11)	32(4)	67(15)	-	-	-	-	-	-	-	35(11)	32(4)	67(15)		

注：()内は内数で外国人留学生を示す

連合獣医学研究科（博士課程）・連合農学研究科（博士課程）

（平成30年5月1日現在）

	現 員				
	1年次	2年次	3年次	4年次	計
岐阜連大大学院生	1	8	5	8	22
岩手連大大学院生	2	6	14	-	22
計	3	14	19	8	44

別 科

（平成30年5月1日現在）

専 修	入学定員	収容定員	現 員								
			1年次			2年次			計		
			男	女	計	男	女	計	男	女	計
草地畜産専修	30	60	9	8	17	12	5	17	21	13	34

外国人留学生

(平成30年5月1日現在)

区分 国名	博士			修士			学部			研究生			特別聴講学生			総合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
インド	1		1			0			0			0			0	1		1
インドネシア	1	1	2			0	1	1			0			0	0	1	2	3
ウガンダ			0	1	1	2			0			0			0	1	1	2
エジプト	1	1	2		1	1			0	1	1			0	2	2	4	
エチオピア		1	1			0			0			0			0		1	1
ガンビア			0	1		1			0			0			0	1		1
ケニア	1		1			0			0			0			0	1		1
ザンビア			0	1	1	2			0			0			0	1	1	2
スーダン		1	1			0			0			0			0		1	1
スリランカ	1	3	4			0			0			0			0	1	3	4
ソロモン諸島	1		1			0			0			0			0	1		1
タイ			0		1	1			0			0			0		1	1
チャド			0	1		1			0			0			0	1		1
パラグアイ			0	1		1			0			0			0	1		1
バングラデシュ	3		3			0			0			0			0	3		3
フィリピン		2	2		1	1			0			0	1	1			4	4
ベトナム	3	1	4	1	1	2			0			0			0	4	2	6
マダガスカル			0	2		2			0			0			0	2		2
マラウイ	1		1	3		3			0			0			0	4		4
マレーシア			0			0	1	1				0			0	1		1
モザンビーク			0	1		1			0			0			0	1		1
モンゴル	1	4	5			0			0	1	1			0	2	4		6
大韓民国			0	2		2	2	2				0	1	2	3	5	2	7
中華人民共和国	6	4	10		1	1	4	1	5	1	1	2			0	11	7	18
台湾			0			0		1	1			0			0		1	1
総計	20	18	38	14	7	21	7	3	10	3	1	4	1	3	4	45	32	77

国費・私費別一覧

(平成30年5月1日現在)

区分 費目	博士			修士			学部			研究生			特別聴講学			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
国費	6	5	11	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	14
私費	14	13	27	13	5	18	7	3	10	3	1	4	1	3	4	38	25	63
総計	20	18	38	14	7	21	7	3	10	3	1	4	1	3	4	45	32	77



国際交流協定締結大学

大学間学術交流協定

締結大学	締結年月日
アルバータ大学 (カナダ)	1985. 8. 1
アスンシオン大学 (パラグアイ)	1986. 4.16
フィリピン大学ロスバニオス校 (フィリピン)	1991. 9.27
忠南大学校獣医科大学 (大韓民国)	1993. 1.11
ミュンヘン大学 (ドイツ)	1994. 7.15
ソウル大学校 農業生命科学大学及び獣医科大学 (大韓民国)	1996.10.21
ペラデニヤ大学農学部 (スリランカ)	1996.11. 7
建国大学校 (大韓民国)	1996.12. 4
江原大学校 (大韓民国)	1997. 8.28
新疆農業大学 (中華人民共和国)	1999. 7.30
モンゴル国立農業大学 (モンゴル科学生命大学) (モンゴル)	2003.10.31
フエ大学 (ベトナム)	2005. 1.12
ベツトスイス連合獣医学部 (ベルン大学獣医学部及びチューリッヒ大学獣医学部) (スイス)	2005. 6.15
マヒドン大学 (タイ)	2005. 7.14
デ・ラ・サール大学及びデ・ラ・サールアラネタ大学 (フィリピン)	2005.10. 5
ハノーバー獣医科大学 (ドイツ)	2007.10.18
ボゴール農業大学 (インドネシア)	2009.12.21
中国黒龍江省農業科学院 (中華人民共和国)	2010. 8.14
国立屏東科技大学 (台湾)	2010. 8.24
チェンマイ大学 (タイ)	2012.12.19
コーネル大学 (アメリカ合衆国)	2013.12. 2
ウィスコンシン大学 (アメリカ合衆国)	2014. 9.25
ヴァルミア・マズーリィ大学 (ポーランド)	2017. 9.25
ポーランド科学技術アカデミー (ポーランド)	2017. 9.25

原虫病研究センターとの部局間学術交流協定

締結大学	締結年月日
フィリピン大学マニラ校公衆衛生学部 (フィリピン)	2008.11. 5
中国農業科学院上海獣医学研究所 (中華人民共和国)	2010. 9.25
中国延辺大学農学院動物医学系 (中華人民共和国)	2011. 9.30

入学者数

平成30年度入学志願者及び入学者数

課程名	区分	募集人員	志願者数			志願倍率	入学者数		
			男	女	計		男	女	計
共同獣医学課程	前期日程	25	59	75	134	5.4	12	13	25
	後期日程	11	53	40	93	8.5	8	3	11
	推薦入試 I	4	6	27	33	8.3	1	4	5
	帰国生	若干人	1	2	3	—	0	0	0
	私費外国人留学生	若干人	2	5	7	—	0	0	0
小計		40	121	149	270	6.8	21	20	41
畜産科学課程	前期日程	115	109	171	280	2.4	46	84	130
	後期日程	35	53	86	139	4.0	9	10	19
	推薦入試 I (A推薦)	20	17	26	43	2.2	9	11	20
	推薦入試 I (B推薦)	40	27	47	74	1.9	16	25	41
	社会人	若干人	0	0	0	—	0	0	0
	帰国生	若干人	0	1	1	—	0	1	1
	私費外国人留学生	若干人	2	3	5	—	1	1	2
小計		210	208	334	542	2.6	81	132	213
合計		250	329	483	812	3.2	102	152	254
第3年次編入学 (畜産科学課程)		10	11	12	23	2.3	3	7	10
学士編入学 (共同獣医学課程)		若干人	3	5	8	—	0	0	0
別科 (草地畜産専修)	一般入試	13	5	3	8	0.6	3	2	5
	推薦入試	17	6	6	12	0.7	6	6	12
	計	30	11	9	20	0.7	9	8	17
大学院畜産科学専攻博士前期課程		48	30	32	62	1.3	27	30	57
大学院畜産科学専攻博士後期課程		10	6	2	8	0.8	6	2	8
大学院獣医学専攻博士課程		5	2	0	2	0.4	2	0	2

平成30年度都道府県別入学者数 (学部)

都道府県名	入学者数			都道府県名	入学者数			都道府県名	入学者数		
	男	女	計		男	女	計		男	女	計
北海道	40	47	87	福井県	0	0	0	山口県	0	0	0
青森県	0	5	5	山梨県	1	0	1	徳島県	0	1	1
岩手県	0	1	1	長野県	0	4	4	香川県	0	2	2
宮城県	1	3	4	岐阜県	3	1	4	愛媛県	0	4	4
秋田県	0	2	2	静岡県	2	2	4	高知県	0	0	0
山形県	1	0	1	愛知県	7	14	21	福岡県	1	2	3
福島県	0	0	0	三重県	3	2	5	佐賀県	0	0	0
茨城県	3	3	6	滋賀県	0	1	1	長崎県	0	1	1
栃木県	3	2	5	京都府	1	2	3	熊本県	1	0	1
群馬県	0	1	1	大阪府	3	9	12	大分県	0	1	1
埼玉県	1	5	6	兵庫県	5	6	11	宮崎県	1	1	2
千葉県	2	3	5	奈良県	0	0	0	鹿児島県	1	0	1
東京都	8	9	17	和歌山県	0	1	1	沖縄県	2	3	5
神奈川県	3	6	9	鳥取県	1	1	2	その他	4	2	6
新潟県	0	1	1	島根県	0	1	1				
富山県	0	0	0	岡山県	2	1	3				
石川県	0	0	0	広島県	2	2	4				
計			102	152	254						



卒業生及び修了者数

(平成30年5月1日現在)

学 科	昭和18年～ 25年度	昭和26年～ 平成28年度	平成29年度	合計
獣 医 科	104	—	—	104
獣 医 畜 産 科	492	—	—	492
専 修 科	3	—	—	3
酪 農 科	115	—	—	115
農 芸 化 学 科	140	—	—	140
農 学 科	56	—	—	56
計	910	—	—	910
獣 医 学 科		2,272	1	2,273
獣 医 学 課 程		158	2	160
共 同 獣 医 学 課 程		—	29	29
家 畜 生 産 科 学 科		660	—	660
酪 農 学 科		1,122	—	1,122
総 合 農 学 科		323	—	323
草 地 学 科		701	—	701
農 産 化 学 科		801	—	801
農 業 工 学 科		667	—	667
畜 産 経 営 学 科		319	—	319
畜 産 環 境 学 科		711	—	711
畜 産 管 理 学 科		828	—	828
畜 産 環 境 科 学 科		1,106	—	1,106
生 物 資 源 化 学 科		352	—	352
生 物 資 源 科 学 科		246	—	246
畜 産 科 学 科		1,236	—	1,236
畜 産 科 学 課 程		1,227	209	1,436
小 計		12,729	241	12,970
畜 産 学 専 攻 科		48	—	48
大学院(修士・博士前期課程)		2,036	51	2,087
大学院(博士後期課程)		78	9	87
別 科		1,202	16	1,218
計		16,093	317	16,410

注：昭和18年～昭和25年度は帯広高等獣医学校，帯広獣医畜産専門学校及び帯広農業専門学校

就職状況

卒業生の進路状況（学部）

(過去3年)

卒 業 年 度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
卒 業 者	249	250	241
進 路 等	就 職 者	171	167
	進 学 者	57	49
	自 営 者	7	6
	そ の 他	14	19

就職者の産業別分類

(過去3年)

産業別		卒業年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
農 業			12	17	9
建 設 業			1	3	0
製 造 業	食料品・飼料等		29	30	38
	化 学 工 業		1	1	1
	機 械 等		0	5	0
	出 版 ・ 印 刷		0	1	1
	そ の 他		0	1	1
運 輸 ・ 通 信 業			1	0	0
卸 ・ 小 売 業			20	9	11
金 融 ・ 保 険 業			12	6	6
サ ー ビ ス 業	医 療 保 健 業		2	1	1
	教 育		6	3	3
	そ の 他		33	33	38
公 務 員			32	35	34
情 報 産 業			5	4	2
農 業 団 体			17	29	22
上 記 以 外			0	0	0
合 計			171	178	167

平成29年度就職者の都道府県別就職先

都道府県名	就職者数	都道府県名	就職者数	都道府県名	就職者数
北 海 道	76	福 井 県	0	山 口 県	0
青 森 県	2	山 梨 県	0	徳 島 県	1
岩 手 県	1	長 野 県	2	香 川 県	0
宮 城 県	4	岐 阜 県	2	愛 媛 県	1
秋 田 県	0	静 岡 県	1	高 知 県	0
山 形 県	2	愛 知 県	4	福 岡 県	1
福 島 県	3	三 重 県	1	佐 賀 県	1
茨 城 県	0	滋 賀 県	2	長 崎 県	0
栃 木 県	0	京 都 府	1	熊 本 県	0
群 馬 県	0	大 阪 府	8	大 分 県	0
埼 玉 県	0	兵 庫 県	6	宮 崎 県	0
千 葉 県	6	奈 良 県	2	鹿 児 島 県	1
東 京 都	23	和 歌 山 県	0	沖 縄 県	0
神 奈 川 県	7	鳥 取 県	0	海 外	0
新 潟 県	2	島 根 県	1		
富 山 県	1	岡 山 県	1		
石 川 県	2	広 島 県	2		
				合 計	167

学生寮

(平成30年5月1日現在)

名称	収容対象	居室数(室)			収容定員			入居現員			建物延面積 (㎡)
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	
学生寄宿舍	学部・大学院修士・別科	97	136	233	144	158	302	107	120	227	5,366

国際交流会館

国際交流会館 I	タイプ	タイプ別基準面積 建物延面積(㎡)	部屋数
	A	12.4	8
B	28.0	13	
C	41.3	8	

国際交流会館 II	タイプ	タイプ別基準面積 建物延面積(㎡)	部屋数
	A	9.7	2
	B	14.5	6
	C	17.7	2
	D	19.7	3
E	23.7	2	

福利厚生施設

施設名	面積(㎡)	備考
学生食堂	667	333席
購買部	589	書籍, 文房具, 日用雑貨, 旅行事業等
理髪店	28	
かしわプラザ	1,346	マルチルーム, コミュニケーションホール等
逍遥舎	130	ホール, 屋外デッキ等

日本学生支援機構奨学生

(平成29年度実績)

種別	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	計
大学第一種奨学生	50	54	58	54	7	5	228
大学第二種奨学生	35	49	34	43	8	6	175
大学院第一種奨学生	13	10	0	-	-	-	23
大学院第二種奨学生	0	0	0	-	-	-	0

その他の奨学金

(平成29年度実績)

財団等	日本学生支援機構以外の奨学金	受給者数
	一般財団法人東和食品研究振興会森記念奨学金, 公益財団法人中董奨学会, 公益財団法人コカ・コーラ教育・環境財団, 公益財団法人栗林育英学術財団, あしなが育英会大村市奨学生	6
財団等	外国人留学生に対する奨学金	受給者数
	公益財団法人ロータリー米山奨学会奨学金, 公益財団法人北海道国際交流・協力総合センター北海道外国人留学生国際交流支援事業助成金, 文部科学省私費外国人留学生学習奨励費, 公益財団法人共立国際交流奨学財団, 公益財団法人海外日系人協会日本財団日系スカラーシップ	16

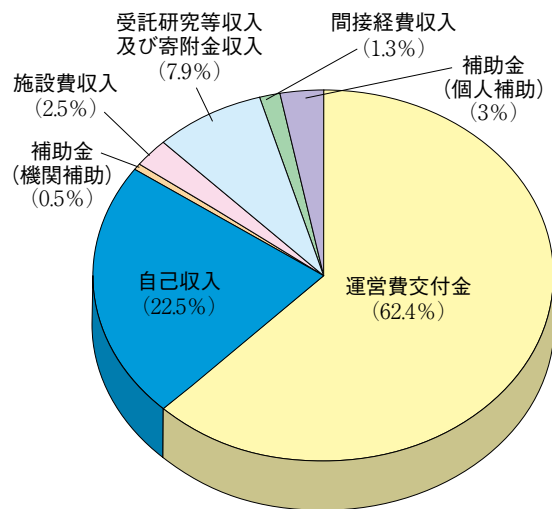
帯広畜産大学独自の奨学金

(平成29年度実績)

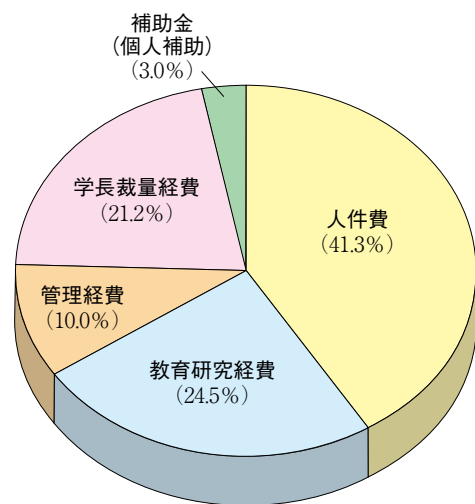
		受給者数
日本人	帯広畜産大学基金奨学金	15
	帯広畜産大学大学院畜産学研究科国際協力特別奨学金	0
	帯広畜産大学大学院畜産学研究科日本人学生特別奨学金(平成25年度~)	6
外国人	帯広畜産大学博士後期課程外国人留学生特別支援制度	21
	帯広畜産大学国際交流締結大学特別奨学金	3

平成30年度収入・支出予算（収支区分別）

収入		(単位：百万円)
収入区分	予算額	
運営費交付金	2,766	
自己収入	996	
補助金（機関補助）	22	
施設費収入	111	
受託研究等収入及び寄附金収入	350	
間接経費収入	56	
補助金（個人補助）	131	
合計	4,432	



支出		(単位：百万円)
支出区分	予算額	
人件費	1,833	
教育研究経費	1,085	
管理経費	442	
学長裁量経費	942	
補助金（個人補助）	131	
合計	4,432	



※学長裁量経費には、人件費493百万円、教育研究経費300百万円を含みます。
 ※端数処理の関係上、合計と一致しないことがあります。

科学研究費補助金等

(平成30年5月1日現在)

研究種目	年度	平成28年度		平成29年度		平成30年度	
		採択件数	交付額(千円)	採択件数	交付額(千円)	採択件数	交付額(千円)
新学術領域		2	6,630	1	4,680	0	0
基盤研究	A	3	29,640	3	29,770	2	17,810
	B	14	66,430	9	41,340	10	51,480
	C ^{注1}	15	23,530	21	30,290	33	52,260
挑戦的研究 ^{注2}	開拓	—	—	0	0	0	0
	萌芽 ^{注3}	—	—	2	5,850	2	7,150
萌芽 ^{注3}		8	11,570	4	5,590	2	2,210
若手研究 ^{注4}	A	1	8,970	1	3,640	1	3,380
	B	12	17,680	17	28,080	8	9,490
若手研究 ^{注5}		—	—	—	—	5	8,060
研究成果公開促進費		1	1,500	0	0	0	0
特別研究員奨励費 ^{注6}		4	5,190	4	4,130	3	3,400
合計		60	171,140	62	153,370	66	155,240

(注1) 基盤研究（C）のうち特設分野研究の平成30年度の内定通知は現在未定
 (注2) 平成29年度から萌芽は挑戦的研究（開拓）と挑戦的研究（萌芽）に再編。
 挑戦的研究（萌芽）の平成30年度の内定通知は現在未定。
 (注3, 4) 表中の平成30年度の萌芽欄、A・B欄の数値は継続課題分のみ
 (注5) 平成30年度から若手研究（A）の公募が停止され、若手研究（B）の名称が「若手研究」と改められた。
 (注6) 特別研究員奨励費（外国人特別研究員）のみ、間接経費を含まない。



財団等からの受入れ状況

(平成29年度実績)

財 団 名	採択件数	金額 (円)
公益財団法人日本科学協会 笹川科学研究助成	2	1,380,000
公益財団法人伊藤記念財団	4	3,300,000
一般財団法人自然環境研究センター	2	1,000,000
公益財団法人武田科学振興財団	1	2,000,000
公益財団法人森永奉仕会	2	600,000
公益財団法人栗林育英学術財団	3	1,100,000
公益財団法人三菱財団	1	600,000
公益財団法人クリタ水・環境科学振興財団	3	1,000,000
公益財団法人寿原記念財団	1	1,500,000
公益財団法人住友財団	1	2,300,000
公益財団法人ロツテ財団	1	3,000,000
一般財団法人キャノン財団	1	3,050,000
公益財団法人内藤記念科学振興財団	1	3,000,000
北海道馬鈴薯生産安定基金協会	1	3,494,000
公益財団法人日本豆類協会	1	2,000,000
計	25	29,324,000

外部資金受入額

種別	平成27年度		平成28年度		平成29年度	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
受託研究費	29	96,040	25	72,825	33	107,685
民間等との共同研究	119	72,925	116	77,629	146	95,314
奨学寄附金	62	84,786	48	126,389	97	120,929
合計	210	253,751	189	276,843	276	323,928

※継続契約・0円契約も全て含む

校地及び建物

区分	校地(m ²)	建物		
		建面積(m ²)	延面積(m ²)	
事務局	} 416,069	979	1,749	
校舎 (事務室・教室・教員室・実験室・実験圃場・ 課外活動施設・その他管理関係施設等)		12,355	30,642	
講堂		968	1,067	
体育館		2,212	2,858	
かしわプラザ		1,115	1,346	
逍遙舎		130	130	
保健管理センター		268	268	
国際交流会館		771	2,175	
福利厚生施設		850	1,546	
講義棟図書館		2,197	4,870	
産業動物臨床施設群		6,825	8,724	
原虫病研究センター		1,282	3,118	
地域連携推進センター		786	1,347	
畜産フィールド科学センター		1,383,682	15,344	16,232
寄宿舎		12,490	1,751	5,366
運動場		65,025	-	-
職員宿舎	22,358	3,473	4,789	
合計	1,899,624	51,306	86,227	

案内図

アクセスマップ



帯広駅から本学まで

●十勝バス

①大空団地線(系統番号70)

帯広駅バスターミナル9番 乗車

緑陽高校前 下車、大学正門まで徒歩約15分

- 所要時間/約30分
- 料金/410円 ●本数/1時間に2本

②環状線北廻り(系統番号28)

帯広駅バスターミナル11番 乗車

畜産大学入口 下車、大学正門まで徒歩約10分

- 所要時間/約30分
- 料金/410円 ●本数/1日4本

③畜大線(系統番号79)

帯広駅バスターミナル9番 乗車

畜産大学前 下車、大学正門まで徒歩約1分

- 所要時間/約30分
- 料金/410円 ●本数/1日2本

●タクシー

- 所要時間/約20分 ●料金/約2,000円(約7km)

とち帯広空港から本学まで

●十勝バス

とち帯広空港～帯広駅前

- 所要時間/約40分 ●料金/1,000円
- ～帯広駅前から上記バスで本学まで

●タクシー

- 所要時間/約25分 ●料金/約5,500円(約21km)

発着案内/(0155)64-5681

バス停のご案内





徽章の由来

このシンボルマークは、「かしわ」の葉をモチーフにしており、キーカラーは生命力や創造力を象徴するグリーン、アクセント的に配したダークグリーンは、本学がめざす知の成熟と実学の深化を表現しています。

発行

平成30年8月

編集発行

国立大学法人 帯広畜産大学 広報室

TEL.(0155)49-5216

〒080-8555 北海道帯広市稲田町西2線11番地

<http://www.obihiro.ac.jp>